

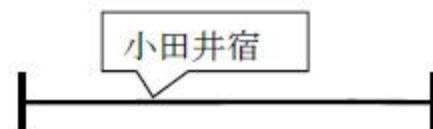


第二十一次

小田井宿

～街道情緒が漂う町～

長野県御代田町小田井
日本橋から 163.2 キロ
京都まで 369.0 キロ



時の流れから取り残されたような町

小田井宿は江戸日本橋より 21 番目の宿場だ。小田井宿は天正年間（473－92）の誕生し、慶長（1596－1615）以降宿場としての機能が整えられた。

昭和に入って数度の工事で、道の中央を流れていた用水路も南側に寄せられてしまったが、東・西の入り口にあった枡形もわずかにその形を留めていて、上の駅・下の駅は茶屋など小商売が多く、中の駅にあった本陣・問屋・旅籠などが多く残り、ほとんど当時のままの宿場風景を見ることができる。

文久元年皇女和宮の御昼食休みに代表されるように、多くの姫君の休泊に利用され、「姫の宿」とも称されている。街道の繁栄期であった文化・文政期には、文政五年（1822）で199戸・人口525人を数えているが、他の時代には小さな規模のお伝馬に生きた宿場であったようだ。和宮より拝領の人形が残され、それにちなんで8月16日に小田井宿祭りがおこなわれている。

当時と同じ町並み

町並みの半分ぐらいは、江戸時代の面影をそのまま残しているようだ。右の写真の本陣跡の安川源内宅や、上の問屋の安川寛氏宅など、京都風の立派な建物が多く残り、現在も住人がそこで生活している。下の問屋は、現在誰も住んでいないようで少し荒れてしまっていたが、立派な構えの建物で明和5年（1768）の大火後すぐに建てられた物だそう。長屋門から中を覗いてみると、切妻造りの母屋が堂々としている。ここは保存指定文化財にもなっているそう。そういった文化財はしっかりと保存し、後世に伝えていってほしいと思う。



穏やかな下り坂の宿場を出ると、一番上の写真のような風景が見える。田畑を過ぎ、浅間山を望みながら、次の宿場岩村田へとむかう。

「小田井宿」前後の歩みの記録

3/28 14:00 追分宿

？

15:45 小田井宿

？

17:25 岩村田宿